

〈研究ノート〉

家族間コミュニケーションを査定する調査票の検討 —投影法であることの証明—

菅野陽子*

要約

先の研究にて、「家族間コミュニケーション」の疎通を考察するために著者による独自の調査票を作成して施行結果を提示した。本調査票を「投影法ともいえる」と表現したが、サイコロジストとして実はそれが「投影法」による心理テストといえるのか吟味する必要があると、著者自身考えた。

そこで、先の2つの予備調査に続けて、更に調査条件の変数をいくつか変更した2つの異なる調査を、質的研究の面から実証的に検討を試みた。本調査票の持つ特徴を精査する迄には至らなかったが、今後も多様な場面で利用できるものにしていく作業を続けたい。

キーワード 家族間コミュニケーション、サイコロジスト、投影法、実証的

目次

1. 問題と目的
 - 1.1 問題
 - 1.2 目的
2. 方法
 - 2.1 調査協力者
 - 2.2 施行手続きと倫理的配慮
 - 2.3 調査内容
3. 結果
4. 考察
 - 4.1 調査票が投影法の1つであることの証明についての検討
 - 4.2 本調査票が信頼できる心理テストであることの検討
 - 4.3 統計処理の問題点
 - 4.4 今後の調査の展望について
 - 4.5 最後に

1. 問題と目的

1.1 問題

2015年3月、「川崎中1殺害事件」のニュースで日本全国に激震が走った。未成年を巡る事件は、新聞はじめ各種メディアにおいて被害者側に対しても加害者側に対しても、「家族のつながり」や「家族の間のコミュニケーション」について様々に取りざたされた。特に子どもたちがLINEはじめソーシャルネットワーク（以下SNSとする）を利用することにより、大人たちには相談せず子どもたち同士で解決しようとすることや、保護者や学校には子どもたちの生活を認識できなくなっている現実が見えてきた。大きなトラブルというにはあまりに残酷で悲惨な事件を引き起こす結果を招いてしまった。

当時TVやマスコミで、評論家にしても一般視聴者にしても「なぜ、事件前に（被害者が）目の周囲に大きな痣を作っていて親は気がつかなかったか」など疑問の声が発せられた。それらは当たり前の疑問といえるかもしれないが、著者は遺族へのそのような「なぜ」という投げかけを被害者支援の立場からするつもりはない。それよりも日本人の家族機能が失われてきていると言われるが、こうした事件はその現れと観ることができるのであろうかということに関心が向く。

たとえば、感覚的なものであるが2011年の東日本大震災の後、特に「家族の絆」というものが人々の心に重きが置かれていたと思う。それが5年経った2015年、少しずつではあるがやや趣が変化したと思えることが、携帯電話会社の商業広告に表れていた。以前は通話料金はじめ各種サービスのなかの「家族割」は、非常時の時の教訓からも「家族のつながり」とか「家族の絆」というものが強調されていた。それが今年のA社を例にあげると「家族ずっと」というキーワードがあり、何がずっとであるかとよく注意を向けると、「25歳迄家族全員が学生とともに学割がある」ということが判明する。これは「家族はずっと家族である」という「関係」を意味しているのではなく、家族ぐるみの経済的利得を強調しているに過ぎなかったといっても過言ではなからう。

そして2016年の今年にはさらに、B社のように「家族まとめて割」といった、家族といっしょに対象機種を買うと家族メンバー皆が得をするサービスが流行であり、学生は毎月〇〇ギガをもらえる学割で、しかも家族で分け合えるというものである。「家族であればサービスを享受できる」というが、企業がまとめて得をするだけの戦略であるように感じてならない。

1.2 目的

そこで先行研究^(注1)において考案した「仮想携帯電話の家族間無料サービス」という概念を用いた調査票を利用して、個人が家族との言語的コミュニケーションの一面である携帯電話機能というツールによって言語的コミュニケーションをとりたいと思う相手はだれなのか、それによりさらには家族のつながりをいかに感じて生活をしているのかを捉えたい。前者は

量的な面から示唆できる点があるといえよう。その上で、後者は質的な調査により、家族に対する関係がどのようになっていて、問題が発生しているのかなどを探ることができるのではないだろうか。それらに解決方法があるのかあるいは予防的に何かができるのかまでは言及できないものの、臨床場面に役立つツールとなるかを考える。

本研究はその調査票がア・プリアリに「投影法ともいえる」として既に調査を施行してきたが、調査票を今一度吟味し直して、それが「投影法の一つ」であることの証明を試みる。

その結果から必要があれば修正をして、改善した調査票を使用して更に研究を進展させていきたい。

それでは、ここで調査票の作成者でもあり施行あるいは代行者から回収して調査結果を査定するサイコロジストの立場から、本調査票が心理テストの1つであることの説明をしておきたい。松原達哉 (2004)^[1]によれば心理テストを16に分類しているが、「V. 性格・人格に関するテスト」として(1)質問紙法(2)投影法(3)作業法の3つに、また「XV. アンケート調査法」として(1)質問形式による調査法(2)世論調査の2つに分けて記述している。

「性格・人格テスト」;(1)質問紙法は診断しようとする人格の特性や構成要因に基づく具体的行動例によって、質問項目群を設定し、それに回答を求める方法である。また(2)投影法は性格に関して直接に質問したり、判断を求めるとでなく、それに対する見方や解釈の仕方、欲求や感情などが自由に表出できるような刺激としての、あいまい模様、絵、文章を与え、これらに対して表出された内容(言語的反応が中心)から、診断者が一定の基準に基づいて、パーソナリティの特徴や問題点を診断する方法である。この方法は、一般的には臨床的な診断において用いられることが多く、検査の方法や結果の解釈には診断者の相当な経験と技術が要求される。(以下(3)作業法は略す)

「アンケート調査法」;(1)質問形式による調査法は、一定の質問によって、個人の現在および過去の経験について尋ねたり、あるいは問題についての意見や判断を調査する方法である。この方法は口答の方法もあるし筆答の方法もある。また個人的訪問によって集められることもあるし、集団的におこなわれることもある。態度・興味・気質・性格・適応性・交友関係・遊びなどあらゆる調査ができる。とくに、多数の者について同時に、かつ比較的簡単に調査することができるので、一般的傾向を調べる方法として重要な道具である。この方法は、観察によっては得られない過去のできごと、未来への希望や、あることについての意見などまで含めて多方面にわたる資料が得られるので、指導上有用である。(以下(2)世論調査は略す)

2. 方法

上述した目的を果たすためのステップとして、まず先行研究で用いた調査票が「投影法」の特徴を持つ心理テストの一種と言えるかどうかを吟味する。著者が考える家族間コミュニケーションの研究は次のような構成からなる。予備調査同様、今回の研究は質的研究と量的

研究の2つからなる。しかしながら、上記の目的を検討するために、まず前者に主眼を置き、考察を行う。「家族とは…である」と定義しないで、調査協力者の思う「家族」という「あいまい」な刺激に対する反応と捉えて検討する方法である。

そこで今回は2つある研究のうち質的研究の方における検討の報告であり、また集計と結果のみを扱っている。統計的処理はさらに研究を進める別の機会に譲るとした。^(注2)

本研究は著者による先行研究「予備調査A」を発展させ、次の3つの調査を実施することから構成されている。

- ①調査1「家族メンバーは誰か」を調査する
- ②調査2「言語的コミュニケーションをとりたい家族メンバー」を調査する
- ③調査3「言語的コミュニケーションをとりたい家族メンバー」を再調査する

2.1 調査協力者

上記の予備調査Aと同様、大学生（浦和大学こども学部2年生から4年生まで）それぞれ①53名、②46名、③48名であり、男女の内訳は①女子31、男子22②女子25、男子21③女子27、男子21であった。

2.2 施行手続きと倫理的配慮

本調査は201X年の「家族心理学/家族の心理学」において行われた。

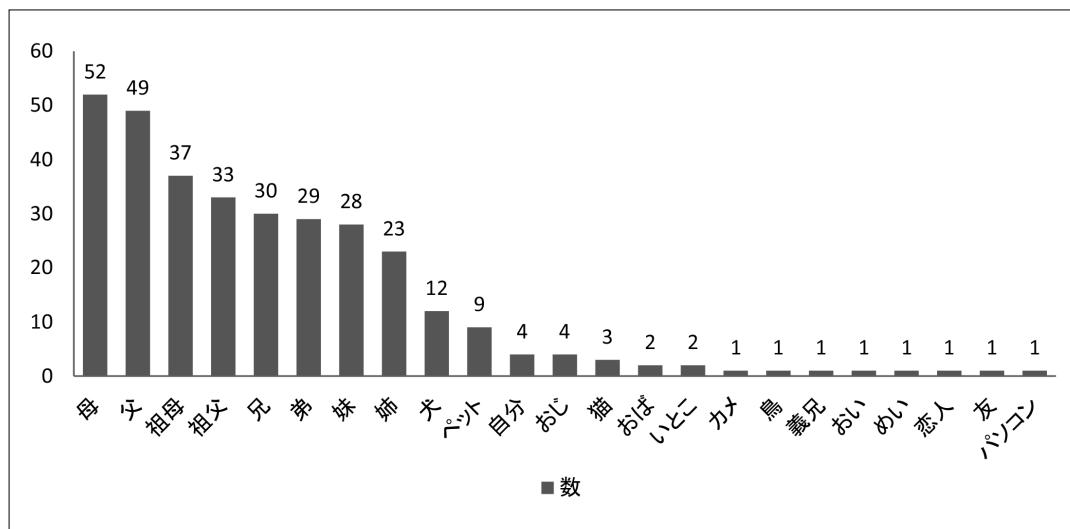
調査対象者に一斉に質問紙を配布し、その場で回収した。授業の一環であり記名式であるが、データは誰と特定しないこと、授業と著者の研究の目的以外に使用しないことを紙面に明記し、また回答は拒否したり中断したりしても調査協力者に授業評価で不利益が生じないことを口頭で伝えた。

2.3 調査内容

①調査1「家族メンバーは誰か」を調査：授業の第1回目で施行した。新たに調査票を作成した。A4サイズの紙面1枚で、「あなたがあなた自身で『家族』と思うメンバーはだれですか？すべて書いてみましょう。（例 母親 父親 祖父 祖母 姉 兄 妹 弟 など）」という質問があり、回答は1. ～10. までの10項目を自由記述する。例を10項目にしたのは、核家族の多い今日ではあるが実際に家族と思う項目がどのくらいあるか知りたいので、5項目では少ないが10項目あればほぼ十分ではないかという推測に基づいている。

②調査2「言語的コミュニケーションをとりたい家族のメンバー」を調査：授業の第2回目で施行した。「あなたが、架空の携帯電話会社『Codomo』の家族間無料サービスに入るとしたら、相手に誰を選びますか？（5人まで。同居でも別居でもOK）」またその答えに「続柄を書いてください（ ）内に呼び名も書いてください」という質問をしている。呼

図1 家族メンバーに選んだ数の多い順位



含めない者は4名であった。以下「祖母」37 (69.8%)、「祖父」33 (57.9%)、「兄」30 (56.6%)、「弟」29 (54.7%)、「妹」28 (53.0%)、「姉」23 (43.4%)と続き、そこから数は減少するが「犬」「ペット」と動物が入ってきた。興味深いのは「自分」を含めた者が4名 (7.5%) いたことである。それは「おじ」と同数であり、「おば」より僅差ではあるが多い。また「恋人」「友人」がそれぞれ1あった (学生の全員が未婚)。時代の反映か、「パソコン」という答をした者が1名ながらいいた。その棒グラフが図1である。

調査2の結果は、「大学生の家族間無料サービスに登録したメンバー」の一覧表が表2-①に、また「大学生の家族間無料サービスに登録した人数 (5人まで)」が表2-②に示されている。男女合計した48名を母数としたとき、多く登録されたのは「同胞」で50 (104%)と実数を超えているが、きょうだいを2名以上選択した者があったことによる。次は一般的には1人である「母親」が43 (89.5%)、次に「父親」が30 (62.5%)と続き、差が広がり

表2-① 大学生の家族間無料サービスに登録したメンバーの一覧表 (第1回目)

	実数	母親	父親	同胞	祖母	祖父	親族	義親子	義同胞	恋人	仲間・友人	配偶者	子ども
女子	27	26	19	35	8	6	6	0	0	1	2	0	0
男子	21	12	11	15	6	3	3	0	0	3	7	0	0
合計	48	43	30	50	14	9	11	0	0	4	9	0	0

表2-② 大学生の家族間無料サービスに登録した人数 (5人まで)

登録数	5人	4人	3人	2人	1人	0人
人数	21	15	11	1	0	0

平均登録人数：4.2人

図2-① 大学生の男女別登録メンバー一覧表（第1回目） n=48

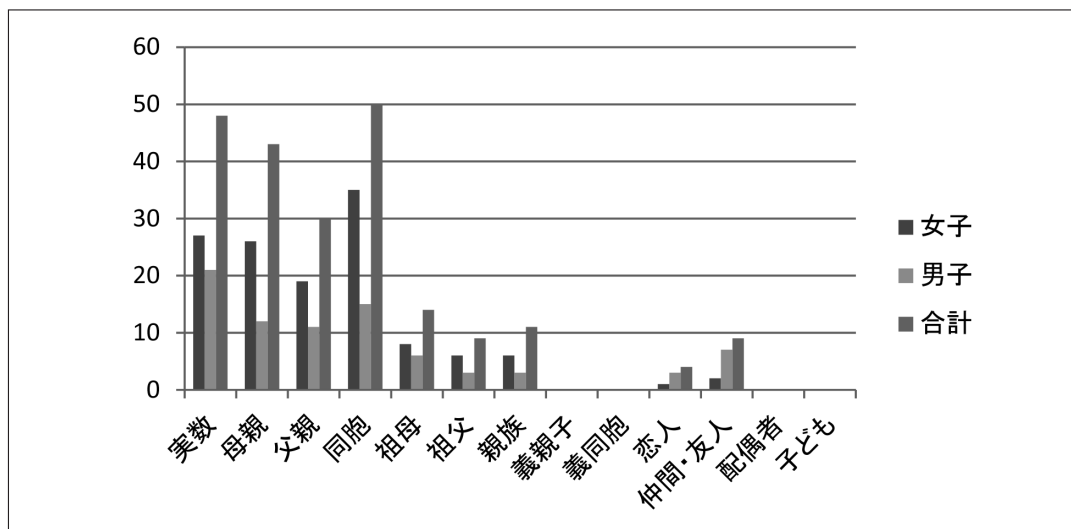
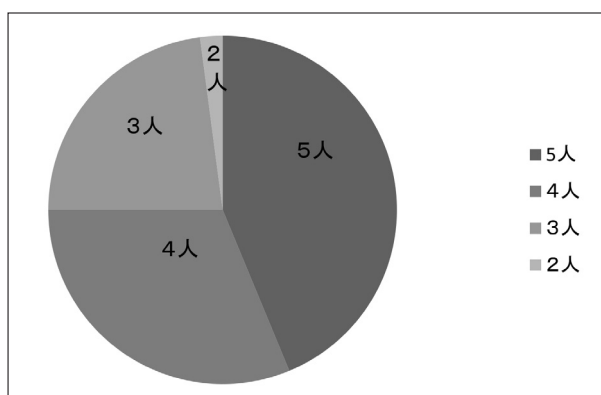


図2-② 大学生の登録人数比（第1回目）



複数の可能性がある「祖母」が14（29.1%）、「祖父」で9（18.8%）と減少していった。ならびに「祖父」と同数で「仲間・友人」が選択されていた。これは予備調査A（201X-7年&201X-6年）において「仲間・友人」が123%と高い数値であったのとはかなり異なり、後の考察で検討する意義がおおいにある。「恋人」は4（8.3%）となった。またメンバーの選択に「母親」「父親」「同胞」では女子学生の選択する割合が男子学生より高く、男女差が明らかに見られた。その棒グラフが図2-①である。

表2-②は、5人のうち登録した人数を示している。最も多いのが5人で21（43.8%）、ついで4人が15（31.3%）、3人が11（22.9%）となり、もっとも少ないのが2人で1名いた。その割合を円グラフにしたものが図2-②である。

調査3の結果は、「大学生の家族間無料サービスに登録したメンバー」の一覧表が表3-①に、また「大学生の家族間無料サービスに登録した人数（5人まで）」が表3-②に示さ

表3-① 大学生の家族間無料サービスに登録したメンバーの一覧表（第2回目）n=46

	実数	母親	父親	同胞	祖母	祖父	親族	義親子	義同胞	恋人	仲間・友人	配偶者	子ども
女子	25	25	21	29	6	3	10	0	1	0	3	0	0
男子	21	19	16	25	8	4	6	0	0	0	6	0	0
合計	46	44	37	54	14	7	16	0	1	0	9	0	0

表3-② 大学生の家族間無料サービスに登録した人数（5人まで）

登録数	5人	4人	3人	2人	1人	0	合計
人数	24	8	9	5	0	0	46

図3-①大学生の男女別登録メンバー一覧表（第2回目）

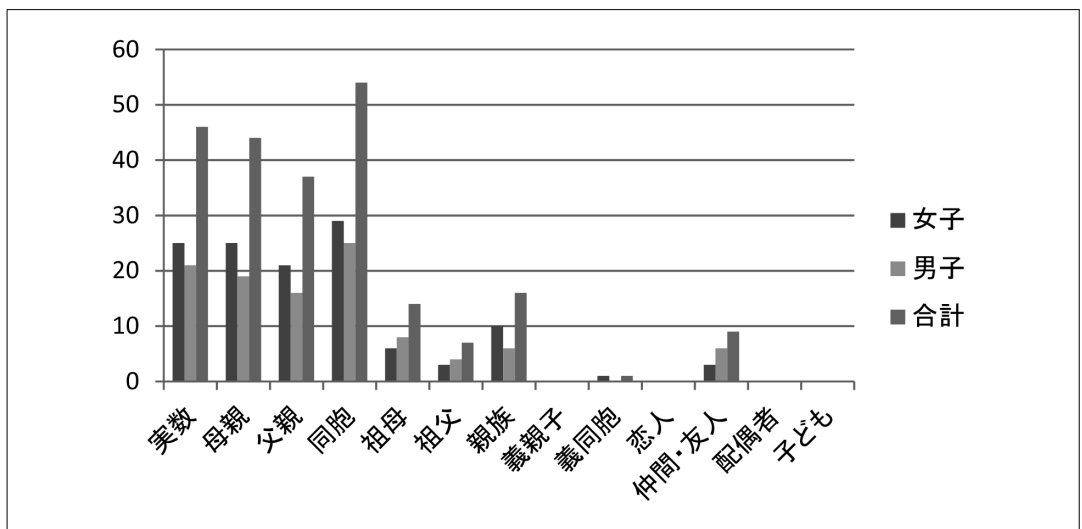
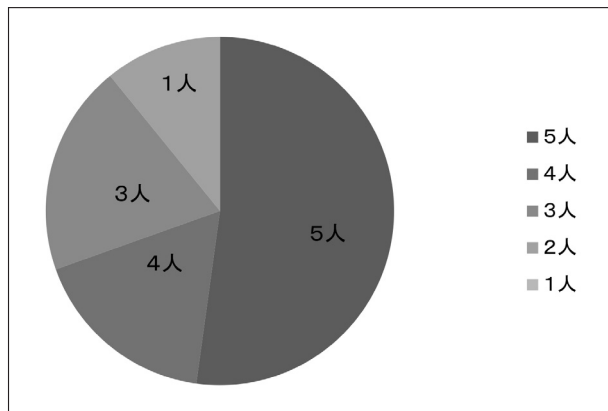


図3-②大学生の男女別登録メンバー一覧表（第2回目）



れている。男女合計した46名を母数としたとき、2人以上選択されたことにより「同胞」が54（113%）と最も多く登録されている。次に「母親」が44（93.4%）であるが、女子は100%で登録している。そして「父親」が37（80.4%）と続く。「親族」16（34.8%）、「祖母」14（30.4%）で、「仲間・友人」が9（19.6%）とあり、そして「祖父」7（15.2%）の順番となっている。「義同胞」が1あり、「恋人」「配偶者」「子ども」は0であった。

登録人数は最も多いのが5人で、24（52.2%）、次が3人の9（19.5%）で、僅差であるが4人が8（17.4%）と続き、2人が5（10.9%）となり、1人だけを登録した者はいなかった。

以上、本研究の3つの調査は筆者の1つの授業「家族心理学／家族の心理学」16回のなかで施行されたものであったが、受講生はその時によって欠席もあり、3回の調査による標本は53から46と減じているが、40名の学生が1連の調査を3回とも協力した。特に1回目は予備調査では行わなかった「家族と思う」メンバーを自由に10項目選ぶことは、2回目以降の反応をみるのに意味があった。

なぜならば、「家族間無料サービス」に「家族外」と思われる項目を書いたとしても、それは協力者自身の範疇からみて「家族である」か「家族ではない」かどうかわからないからである。この調査1で大学生の「家族と思うメンバー」は多い順番から母、父、祖母、祖父、同胞でいわゆる一般的に考えられる血縁の近い親族に属する。ペットは近年同居する家族の一員と位置付けられているとあってよい。

さらにいえるのは、「恋人」や「友」がわずかの1であったことは、2回目と3回目の調査で、「家族間無料サービス」という条件にもかかわらず2回目「恋人」が4、「友人・仲間」が9と増加し、3回目では「恋人」は0ながら「仲間・友人」は同数の9であった。つまり「仲間・友人」は家族と思わないが「仮想携帯電話会社の無料家族間サービス」に入りたいということと推測が可能である。

調査2（授業の2回目）と調査3（授業の16回目）で調査した登録メンバーの変化はそれほど大きくはないが、標本が48から46と減じたが、特に「父親」が7、同胞が4およびその他の「親族」が5と増加している。そのぶん、「恋人」は0となった。

また、調査2で登録した人数は5人のうち平均4.2で、調査3のそれは平均4.1とほとんど変わらなかった。ただし割合から見ると調査2は5人選択したものが43.8%で、調査3では52.2%と若干半数を超えて増加している。3回の調査結果をまとめていえることは、「家族と思うメンバー」の順位は、仮想携帯電話会社の「家族間無料サービス」に登録するメンバーの順位とほぼ一致した。（同胞は複数で選択されたので実数以上になっているため多くなっている）

4. 考察

以上著者による独自の本調査票を用いた調査から実証的にいえることをサイコロジストと

して以下の2点から考察する。

4.1 調査票が投影法の1つであることの証明についての検討

あらためて本調査票は「質問形式による調査法の形をとりながらも、投影法も取り入れている心理テストである」ということを主張したい。すでに述べたとおり、「アンケート調査法」は心理テストの範疇であることが前提である。それにより、本調査票は心理テストの1種であると定義される。

次に「投影法」は通常性格テストであるが、ここでは本調査票が被験者＝調査協力者の見方や解釈の仕方、欲求や感情などが自由に表出できるような刺激としての「あいまいな文章」に対して反応したことの内容から一定の基準に基づいて彼／彼女の「家族への関わり方」の特徴や問題点を診断するといえないだろうか。ここに臨床場面で用いる意義が大きいことを強調する理由がある。

さらに「あいまい」な刺激であるという証明であるが、通常な調査法ならば問題を作成するときに、「家族とは血縁関係であること」など定義すべきと考えるが、意図的に限定せず、またその選択は自由であり、なにより「仮想携帯電話会社」に登録するという設定におき、現実に登録しているかどうかではなく、被験者＝調査協力者が「言語的コミュニケーションをとりたい」かどうか、またとりたい家族はどのくらいいるか、があまり意識せずに（つまり投影的に）反応することが期待できる。

また、より明確な証明には実験群と統制群を分けて調査が必要であるか検討してみた。「家族を定義しない」グループと「家族を定義する」グループ2つで調査した結果を比較・検討する構成になる。予備調査の大学生では「友人・仲間」で一番人数が多かったが、制限すれば登録人数がそのぶん減ったかもしれないなど全体への影響はあったであろう。今回の調査では親族以外の登録はかなり少なかったのであるが、そういった実験も考慮すべきかもしれない。ただ、著者は前もって「あなたの家族は誰ですか」と家族メンバーを確認しておき、次の登録を誰にするかを問うという方法は適していたと考えている。

最後に「登録したメンバーをみて、自分自身で感じたこと気がついたこと」を記述してもらおうが、やはり質的研究とすればそれと個人の情報を照合していく作業になるので、調査協力者の家族に対する見方や感情などが表出されたものが伝わってきた。もちろん、データはコード化しているが個人情報の守秘にも十分配慮すべき調査であった。

4.2 本調査票が信頼できる心理テストであることの検討

前述の松原(2004)は「よいテストの条件」^[2]として次のことを挙げている。

1 妥当性 (validity)

テストが測定しようとする目的を、どの程度正しく測定しているかを示すものである。しかも、カリキュラムや学年程度にじっくりした問題範囲であることが大切である。

2 信頼性 (reliability)

同じ検査者が同じ被検査者に、一つの検査を2回または2回以上実施した場合に、各回の検査の結果に高い相関度のあることである。あるいはまた、検査者が異なっても、同一の結果が得られるものをいう。信頼度を数値で表したものを信頼度係数といい、 $r=0.7$ 以上が望ましい。

3 客観性 (objectivity)

検査を採点する者の個人的判断が採点に影響しないとき、検査は客観性をもつという。一つの問題に対して答えが幾通りもあつたり、質的差のために採点に迷うようでは、客観性があるとはいえない。誰が採点しても一致した評価であるように、個人的好悪、先入観、意見などを除くことが大切である。

4 実施の容易さ (administrability)

優れた検査でも非常に複雑であつたり、手続きが面倒で専門家以外は手がつけれないようでは困る。時間もあまりかからないで、児童・生徒が比較的理解しやすい方法が選ばれているとか、教師の側も労力の点や熟練の点で無理がないものほど実施の容易さは高い。

5 採点の容易さ (scorbility)

採点方法が単純で、すみやかに誤りが少なくできること。

6 経済性 (economy)

利用する場合、あまり高価でないこと。

以上から著者による本調査票は6のうち5項目は当てはまるのではないかと自負している。しかしながら、もっとも問題となることは2の信頼性についてであり、研究1において調査2と調査3で2回施行した結果を出してあるので信頼度係数を計算することが可能である。

4.3 統計処理の問題点

上述の計算は次回の機会に譲るとして、あとは著者自身設定した尺度について問題を感じている。というのは、誰を登録したかを「人数」でカウントすると一般的には1人の「父」「母」と複数の可能性がある「子ども」「同胞」「祖父母」を同じ等間隔尺度にしてしまうことである。よって、実数ではカウントするが登録する比率を比較する場合にはどの項目も0か1としてカウントして計算するとした方がよいのだろう。そういった改善点も気づいたので、今後はどのような等間隔尺度を作成するか、データをどのように整理するかなどを検討していこうと考える。

これまでいくつかの面から本調査票を検討してきたが、結論として調査票としてはおおよそ信頼できる心理テストとして成り立っているといえるのではないかと考えたい。もちろん、どの心理テストにも効用と限界があるのである。また、テストによって信頼性が乏しいのであり、標準化、調査者と調査協力者との間の信頼関係、検証尺度 (lie scale) の設定などが望ましい。

また学生の個人情報守秘の課題も大きく研究は慎重にされねばならない。これらのことを考慮しながら、今後は臨床場面の応用も取り入れて、検討を重ねていくことにする。

4.4 今後の調査の展望について

大学の授業内における調査から研究に結びつける困難もありながらも、学生とともに「自分にとって家族とは何であろうか」「家族間のコミュニケーションはどうなっているのか」を調査し、書物の上やメディアの情報からではなく、自分の家族間のコミュニケーションの一端について検証的に考える授業は続けていきたいと思う。そのデータ処理においては学内の倫理審査委員会に承認されるものになれば、さらなる精度を高めた調査方法となると考える。

臨床場面では、本調査票が来談者に侵襲的でない長所がある。直接に「家族とはコミュニケーションがとれているかどうか」「だれと仲が良いか」など質問されることがないからである。また、記入した後でカウンセラー（セラピスト）と来談者と家族関係について話し合うきっかけともなる。とくに学校臨床において便利な質問紙といえよう。

冒頭に書いたように、若い世代から熟年世代もラインやSNSの普及がめざましく、携帯電話で言語的コミュニケーションを観るのは少々古いという感想を聞いたこともあるが、会話もメールもできる携帯電話の使用はまだ有効なツールと考える。しかしながら、今後は携帯電話に限定せずに質問紙を開発することも考え合わせていくべきかもしれない。

4.5 最後に

最後に、もう一度この研究の契機となった問題に戻ってみよう。

家族研究・家族療法学会の機関誌に、「家族というテーマを扱った本は売れない」と学会の立場から嘆いた文を読んだことがあった。しかしながら、昨年2015年1月に「家族という病」^[3]という新書が出てたちまち2か月で9版というベストセラーになっていた。「ついに家族は病気にされたか」といささか驚いたが、要は家族だと思って分かりあえていると思うのは錯覚であり、理解しようと思うことがおこがましいことである。また、日本人は血のつながりにこだわり過ぎると指摘し、親も子もそのこだわりを捨てればもっと自由になれるという論旨の本である。

その2年前には信田が「コミュニケーション断念のすすめ」^[4]を著している。こちらは、臨床心理士でカウンセリングの現場で日々家族問題を抱えたクライアントと向き合っており、日本はコミュニケーションが過剰である。息苦しい「絆」信仰ともいえるべきものが相手を強制

するもので、「家族は思考停止の場」と捉える。

どちらも小気味いいほど切り口が鋭い女性2人による著書であるが、精神科医の斉藤(1995)が「『家族』という名の孤独」^[5]の末尾で、「家族に包まれることは恵みだが、家族のぬくもりに酔うのは危険である。人は人の群れの中で真の孤独を感じる。そしてその孤独の痛みが、他者との関係を大切にさせる。家族の中で人は孤独を知り、他者を求める自己を知る」と結んでいる。すでに過度につながりたいという危険を指摘していた。

日本の若者の貧困、こどもの貧困問題を研究している宮本(2016)は若者が家族からも社会からも見捨てられる現実を訴えているが、先日講演会^(註3)で興味深いことを述べていた。「日本人は『サザエさん』を相変わらず理想の家族とみていて、一方で家族は面倒だとか結婚はしたくないといった葛藤状態にある」と。今回の大学生の調査では、伝統的な血縁の関係にある者を家族メンバーとして認め、また言語的コミュニケーションも家族メンバーと関わりたいという結果が出ていたが、やはり彼らも「家族はつながっているもの」と強迫的に思い込む面があるのだろうか、まだこれからも探求を続けるという結語にしたい。

謝辞

本調査に協力していただいた宇野努氏と子育て支援講座の受講生の皆様、そして浦和大学子ども学部の学生の皆様に深く感謝いたします。

(注)

- (1) 菅野陽子、浦和大学・浦和短期大学部「浦和論叢」第42号、pp. 41～53、2010
- (2) 浦和大学倫理審査委員会において承認された(2015. 7.8 006号)。研究期間は著者の申請により、2015年6月から2015年9月であった。また承認されたが、研究1において、調査1、調査2、調査3はそれぞれ独自でデータ分析するという限定条件が付された。
報告の調査は、調査協力者に個人情報保護のため特定されないように200X年としてこの承認以前の実施した結果であるが、当該委員会の内容にそって、今回は3回の調査結果を組み合わせる解析することはしなかった。本論は、このような経緯から数種類の統計処理を行うことはせずに、調査票の検討を単純なローデータの範囲にとどめておこなっている。
- (3) 宮本みち子、第26回心の健康会議『こころ豊かな長寿社会の創生－臨床心理士への新たな期待とまなざしー』主催：公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会、平成28年3月12日、熊本市市民会館崇城大学ホール、基調講演『無縁社会にしないために～私たちにできること～』

引用文献

- [1] 松原達哉、「心理テスト法入門」、日本文化科学社、東京、p12、2004
- [2] 松原達哉、「心理テスト法入門」、日本文化科学社、東京、pp24～25、2004
- [3] 下重暁子、「家族という病」、幻冬舎、東京、p142、2015
- [4] 信田さよ子、「コミュニケーション断念のすすめ」、亜紀書房、東京、pp63～64、2013
- [5] 斎藤学、「『家族』という名の孤独」、講談社、p291、2014

参考文献

村上宣寛、「心理テストはウソでした。」、日経BP社、2005

宮本みち子、「若者が無縁化する」、筑摩書房、2014

Summary

Reviewing a questionnaire to assess communication among family members
— Demonstrating that it can be called a projection method —

Yoko Sugano

In the previous study, an original questionnaire was devised by the author to consider problems in communication among family members and the results were presented. The author stated that the questionnaire could be called a projection method, but as a psychologist, she thought it would be necessary to examine if the questionnaire can indeed be called a psychological test using a projection method.

Following the previous two pilot studies, two different studies with some variables in study conditions changed were tried to be empirically reviewed from both quantitative and qualitative aspects. The review did not go as far as to examine the characteristics of the questionnaire in detail, and the author wishes to continue the work to make it useful for various situations.

Keywords communication among family members, psychologist,
projection method, empirical

(2016年5月19日受領)